

竹下和男先生の『自分で作る“弁当の日”』 とても素晴らしい講演会でした！！

遺愛学院講堂で10月29日（土）14:00-15:30に行われた竹下和男先生の食育講演会は、はじめから泣かされ、さいごは、じわじわと幸せ感が伝わってくる素晴らしい講演会でした。

冒頭から絵本「はなちゃんのみそ汁」に、一青窈の歌『ハナミズキ』をBGMとしてかぶせて見せて下さいました。私の目からは涙がとまらず、竹下先生の演出にやられて、はじめから心を打たれてしまいました。一番前の先に座っていたので、他の人は私が涙ぐんでいるなんて思わないだろうと思っていた矢先に「校長先生が涙ぐんで…」と竹下先生がバラすものですから、照れくさいやら恥ずかしいやらで参りました。

『はなちゃんのみそ汁』は、がんのため33歳でこの世を去った安武千恵さんの夫・信吾さんが5歳の娘はなちゃんとの日々をつづったブログ『早寝早起き玄米生活』をまとめたエッセイで、映画化もされました。

乳がんを宣告された千恵さんに信吾さんはプロポーズし、夫婦となりました。妊娠した千恵さんは、産むことによって高まるがんの再発リスクを知らされて悩みますが、周りの支えで決意し、はなちゃんを出産します。が、しばらくして余命があとわずかと判明。自分がいなくなっても暮らしていけるようにと千恵さんは、鯉節を削ることから始めるみそ汁やごま塩の作り方、玄米の炊き方などの料理方法や家事の大切さを、はなちゃんに教え始めました。二人の最後の約束は「毎朝、自分でみそ汁を作ること」。お母さんが亡くなり、信吾さんと二人の生活になった5歳の誕生日から、その約束は守られ続けられました。年齢が高くなり思春期になると難しくなる父と娘との間の会話は、朝早く2人で起きて、はなちゃんがみそ汁をつくり、信吾さんがおかずをつくることで保たれてきたそうです。

竹下先生は、小中学校の校長時代から、子ども達に自分で昼のお弁当を家で作ってくる日（年2～3回）を設けるという実践をしてきました。それで子ども達が大きく成長し、自分を育ててくれた親への感謝の気持ちを持ち、親子間に優しい気持ちが醸成されていくのを目の当たりにしてきたそうです。

それで定年退職した後も、親は決して手伝わない『自分で作る“弁当の日”』の普及のために、47都道府県を2400回以上講演して回っています。本当に素晴らしい実践で、心から感服しました。



幼児からでも包丁を使いこなし、火を使い、料理ができるということ。5才の時にこそ、親の手伝いをしながら料理を作る意欲が一番高まるそうです。ぜひ、遺愛の幼稚園でもしてみたいなと思いました。その前に幼稚園の先生方と保護者を説得しなければなりません。竹下先生をお呼びして、もう一度遺愛学院で講演していただきたいと思っています。

2021年11月1日